回帰することば
——ソシュールの余白

金澤　忠信

20世紀は「言語の世紀」と言われることがある。言語についての研究が言語学の枠内にとどまらず、隣接諸科学にも大きな影響を与えたことはたしかである。そのなかでソシュールを近代言語学の「父」ないし「創始者」とみなすことは定説なっていると言っていいだろう。しかしとりわけ、いわゆる「構造主義」の衰微とともに、その「創始者」として批判され、そして今では批判されることすら少なくなったのも事実である。これは、ソシュールはすでに乗り越えられてしまっているとみなされているのがひとつの要因ではないだろうか。実際、ソシュールがついに「言語学に革命をもたらし」て「構造主義言語学の父」となり、これが「第二革命、ヴィトゲンシュタインを父とする語用論（プラグマティック）の革命によって転覆された」という「流布する二つの先入観」を「言語学史は難なく受け入れていた」とする説もある[1]。またルイ＝ジャン・カルヴェのように「構造主義言語学の父」としてのソシュールには「反対」するけれども、アナグラムを含め具体的言語事象を研究し社会言語学へ向けて開かれているソシュールには「賛成」するような、「ラングからパロールへ」を読み込む傾向が根強くあって、今日までのソシュール評価を決定づけているように思われる[2]。

第一章ではまず「父」という形象に着目しつつ、ソシュール評価および批判の典型について再確認してみる。それは、結論から言えば、ソシュールはすでに死んでしまっていた「父」である。そのうえで、第二章では、そうした批判と、初期ソシュールにおけるそれ以前の言語研究への批判とを対比させながら、ソシュールとロマン主義との関わりを示唆し、「言語（ラング）それじたい」の存在の問題も併せて提示してみたい。非学術的な出版物や草稿から引用しているのと、限られた紙面で大雑把な図式化を試みたのとで、そもそも仮説的な議論がさらに粗雑になっていることをあらかじめお断りしておく。

1 Brigitte Nerlich : « Le même et l'autre — Le problème de l'identité en linguistique chez Saussure et Wittgenstein » in *Cahiers Ferdinand de Saussure* (CFS) 37, Librairie Droz, Genève, 1983, p. 13.

2 Louis-Jean Calvet : *Pour et contre Saussure, vers une linguistique sociale*, Paris, Payot, 1975.

第一章　ソシュールをめぐる言葉

1. バンヴェニストのソシュール

フェルディナン・ド・ソシュールは1913年2月22日、56歳で亡くなる。そして彼の弟子シャルル・バイイとアルベール・セシュエが、生前彼の講義に出席した学生の講義録や若干の手稿を基に、新たに一冊の書物を書き上げ、1916年に出版する（『一般言語学講義』、以下『講義』）。その後何度かソシュール自身の手稿が公表されたが、一部の研究者を除き、現在でも「ソシュール」と言えば大抵この書物を指す。

エミール・バンヴェニスト (Émile Benveniste, 1902-1976) は1963年2月22日、ソシュー

ル没後50周年を記念して、ソシュールの故郷ジュネーヴで講演を行う。そのなかでバンヴェニストが強調するのは、ソシュールの「思想」である。この「思想を生んだ人」は「その時代の人からはすでにほとんど忘れ去られ」(« déjà presque oublié »)[3]ており、「彼の教えの一部などは長い間、ほとんど死んだもののように不毛であり続け」(« est restée à peu près inerte et improductive pendant lontemps »)[4]た。しかし「その思想を生んだ人の姿を、あらわにしてみたり、うちけしてみたり、またつくり直してみたりしながら、思想は思想自身の生を生きてゆくかに思われることがときには起こる」[5]。実際ソシュールの「思想」は死後、第一次大戦中に『講義』として復活し、第二次大戦後1950-60年代に今度は「構造主義の父」として復活する。「干戈のさ中において、だれが一巻の言語学書に意をとめることができたでありましょうか？　大いなる出来事は鳩の跡を追うてきたるというニイチェの言葉がこれほど真実であったことはないのであります」[6]。そしてバンヴェニストはソシュールを「ヨーロッパの思想史中の人」(« Saussure appartient désormais à l'histoire de la pensée européenne ») あるいは「先駆者」[7]とみなし、亡きソシュールと「二世代の距離を隔てている」「われわれ」の「生」や「運命」がすでに一体をなしていることを述べて講演を締め括る。

> 過ぎ去った半世紀を一望におさめてみるとき、ソシュールはその運命を十分に果たしたのだと言うことができます。此岸における生命を越えて、彼の思想は彼みずからもおそらく想像しなかったほど遠くまで輝きわたっております。そしてこの死後の運命はいわば第二の生ともいうべきものとなり、そしてその第二の生はかくてわれわれの生と一つに渾融してしまっているのであります[8]。

「ソシュールはその運命を十分に果たし」(« Saussure a bien accompli sa destinée. ») てしまっている。そして「此岸における生命を越えて」(« Par-delà sa vie terrestre »)、「彼の思想」(« ses idées ») は「われわれの生」に継承されて同化し、そして発展し、「死後の運命」(« cette destinée posthume ») は「第二の生」(« une seconde vie ») となる。ここでの継承とは、亡くなった「先駆者」と「われわれ」との「世代」間の継承のことであるが、ここではたらいているのは果たしてたんに故人の遺徳を偲ぶ儀礼上の配慮だけであろうか。「彼の思想」の継承ないし我有化には内的な理由があるのではないか。

バンヴェニストは「ラングの記号学」(1967年) のなかで、「記号(シーニュ)」を「唯一の原理」とするソシュール理論の「乗り越え」を主張している[9]。そこでは「閉じた記号の世界」から「パロール」へ到る方向に力点が置かれ、そのうえで「記号論領野(ル・セミオティック)」と「意味論領野(ル・セマンティック)」が区別づけられる。後者は「言説(ディスクール)の次元」、前者はソシュールが設定したとされる「記号の体系」である。「言語記号のソシュール理論」は「意味論(セマンティック)」研究にとって「基礎として役立つ」[10]。そしてこの「乗り越え」は「『第二世代』の記号学」になるという。たしかにこれは「構造主義言語学」のひとつの「乗り越え」であるかもしれない。しかしそのためには「記号論領野(セミオティック)」を「閉じた記号の世界」としていったん固定しておかなければならなかった。「意味論領野(ル・セマンティック)」が「乗り越え」を行うには、「乗り越え」られ

3 エミール・バンヴェニスト、『一般言語学の諸問題』(以下『諸問題』)、河村正夫他訳、みすず書房、1983年、49-50頁。Émile Benveniste : *Problèmes de linguistique générale 1* (PLG/1), Gallimard, Paris, 1966, p. 44.

4 同書、48頁。*Op. cit.*, p. 43.

5 同書、49頁。*Op. cit.*, p. 44.

6 同書、50頁。*Op. cit.*, p. 45. ちなみに、『講義』の編纂・執筆は中立国スイスで戦火をよそに2年半の間に完成しているが、ペーター・ヴンデルリの仮説によれば、出版後しばらくして様々な分野の学者たちがこぞってソシュールを援用するようになったのは、まずひとつには『講義』があらゆる種類の知的伝統を結集しており、それらが各研究分野の要請をそれぞれに満たすことになったからというのと、もうひとつは、第一次世界大戦後、新たな言語学のパラダイムを求める気運が広まり、「憎しみとナショナリスムに引き裂かれたヨーロッパのなかで」、「一人のスイス人の、中立国の代表者の著作が理想的な解決をもたらした」からだという。Peter Wunderli : « Problèmes et résultats de la recherche saussurienne » in CFS 36 (1982), p. 120.

7 『諸問題』、50頁。PLG/1, p. 45.

8 同所。*Ibid.*

9 PLG/2, 1974, p. 66.

10 *Op. cit.*, p. 65.

るべき「記号論領野(セミオティック)」を必要とした。そしてこれにともなって、「ヨーロッパの思想史」の上でも「ソシュールはその運命を十分に果たし」てしまっていなければならなかった。「先駆者」、「創始者」はその位置を固定され、「ヨーロッパの思想史」における役割を解任されるのとひきかえに、「輝きわた」る「死後の運命」、「第二の生」を享受する。しかもそれは「われわれの生と一つに渾融してしまっている」のだから、継承された遺産を「基礎として役立」てる随意使用権は「われわれ」、すなわち「『第二世代』の記号学」[11]が手にしている、というわけだ。(「『第二世代』」の引用符はバンヴェニスト自身によって付されたもの。これによって、ソシュールの提唱した「記号学」は「第一世代」であったことになる。)

11 *Op. cit.*, p. 66.

2. 構造と使用

ソシュールを批判し、「乗り越え」ようという様々な主張が根拠とするのは、ごく大雑把に言えば、ソシュールには「パロールの言語学」がなく、「ラングの言語学」に終始したということだろう。(ちなみにバイイ=セシュエによれば、1910-11年の第三回一般言語学講義のプログラムのなかでは約束されていたこの種の研究が反故にされた理由は、「世人の知りすぎるところ」[12]、つまりソシュールの病状が悪化し急逝してしまったからだという。) それらの説は、「ラング」と「パロール」、「体系」と「言説(ディスクール)」、「構造」と「使用」等々の相関関係もしくは弁証法を前提とし、それによって言語事象全体をカヴァーする、真の意味での「一般言語学」(la linguistique générale) が打ち立てられると考える。

12 フェルディナン・ド・ソシュール、『一般言語学講義』(『講義』)、小林英夫訳、岩波書店、1972、4頁。

もし仮に「語用論(プラグマティック)」や「社会言語学」が「構造主義言語学」を「乗り越え」たと考えているとしたら、それは「構造」が具体的・個別的な「使用」から、「パロール」と呼ばれるものから還元・抽象されている自己完結的なものであって、それがそのままでは、いわゆる現実の世界なり社会で効力を持たないという不満に多少ともこたえたという自負があるからだろう。しかし「構造主義言語学」は最初から様々な言語現象の形式化を目的にしているのであり、この場合「構造」の重要性とは現実における効力なのではなく、その抽象的形式が「使用」を分析するのにどれだけ役立つかということである。ところで、「使用」がなされるためには何かしら使用されるものが前提される。その使用されるものとはやはり「構造主義言語学」が抽象してきたものである。ここには一種の循環論法がある。「構造」と「使用」が二項対立をなす限り、いかに「使用」により高い価値を置くとも、やはり「構造」を前提とするほかない。「構造主義言語学」を「転覆」するタイプの「語用論(プラグマティック)」は、循環論法のなかで「構造」と「使用」の価値の反転のうえに成り立っている。

3. 父、先駆者、予見者

「父」はしばしば「先駆者」あるいは「予見者」と同等視される。「その時代の人から

はすでにほとんど忘れ去られ」、死後しばらくしてにわかに脚光を浴びたソシュールは、「先駆者」の条件に合いすぎた。ソシュールは、自称・自認することなく「構造主義者」だったとみなされる[13]。またヨハネス・フェールは「ソシュールとデリダにおける記号理論あるいはジャック・デリダのソシュール読解」(1992年)のなかで、「こんにちでは、ポスト構造主義すらもそこかしこですでに古びた理論に数えられるのであってみれば、この運動の理論的内容が何であったかを言うことは、それほど容易ではない」が、しかし「レヴィ＝ストロース、バルト、ラカンあるいはルイ・アルチュセール、ミシェル・フーコー、またある意味モーリス・メルロー＝ポンティやポール・リクールのような思想家たちを結びつけているもの、それは彼らが――彼らそれぞれの出発点に違いはあるにせよ――ソシュールに拠り所を求めている、あるいは少なくとも彼の記号理論と真っ向から取り組んでいるということである」[14]と指摘したうえで、彼の結論としては、デリダは構造主義に暗に含まれているイデオロギー的要素を批判しようとしているのに、「その当の構造主義と同様、ソシュールの言語記号概念の根底にある認識理論上の問題に盲目である。」「かつてクロード・レヴィ＝ストロースは、言語学は実証主義的学問として、また他の諸学問の規範として樹立されることが可能になったと見ていたが、言語記号に対するソシュールの反省はそのような単純な解決策を提示するのではなく、むしろその種の解決策の妨げとなるようないくつかの問題点を指摘している」。したがって「構造主義の父と呼ばれるようになる前から、ソシュールは既にポスト構造主義を予見していたのである。」[15]これなどは、予見説の最たるものだろう。「構造主義」が衰微し、今度は「ポスト構造主義」なるものが現れて、「構造主義」を乗り越えようという動きを見せると、「構造主義の父」たる「ソシュールは既にポスト構造主義を予見していた」となる。ソシュールから「構造主義」へ、「構造主義」から「ポスト構造主義」へという思想史上の単にクロノロジックな順序にしたがって、新しい知のあり方が出てくるたびごとに、そこから遡って「父」や「祖父」のテクストにはそれと適合していたことになるものがあり、したがってそれを先取りしていたのだと主張するのである。

次章ではソシュールを「先駆者」として後ろ向きに見返すのではなく、ソシュールが19世紀の歴史言語学およびロマン主義的な発想からいかに訣別するかを、きわめて概略的にではあるが見ていくことにする。

13 Cf. Georges Mounin : *Saussure ou le structuraliste sans le savoir*, Seghers, Paris, 1968.

14 Johannes Fehr :« Die Theorie des Zeichens bei Saussure und Derrida oder Jacques Derridas Saussure-Lektüre »in CFS 46 (1992), p. 38.

15 *Op. cit.*, p. 54.

第二章　ことばをめぐるソシュール

1. 言語学者ソシュールの出発点

スイス、ジュネーヴのソシュール家からはとりわけ自然科学系の学問で傑出した人材が輩出している。農学者であったニコラ (Nicolas de Saussure, 1709-1791) はブドウ栽培法の改良で知られ、ヴォルテールやディドロら編纂の『百科全書』にも執筆している。その息子のオラス＝ベネディクト (Horace-Bénédict de Saussure, 1740-1799) がソシュール家の歴史のなかではおそらく最も有名で、地質学・物理学・植物学など多くの分野で早

熟ぶりを発揮し、22歳でジュネーヴ・アカデミー（現ジュネーヴ大学の前身）の哲学および自然科学教授、34歳で学長に任命される。1787年には学術調査の目的でモンブラン初登頂に成功している。彼の長女アルベルティーヌ＝アドリエンヌ (Albertine-Adrienne, 1766-1841) は特に文学的領域で活躍した点で、フェルディナンと並び異彩を放っている。彼女はジュネーヴの旧家ネッケル家のジャック（ジュネーヴで植物学の教授）と結婚した関係で、フランス・ルイ王朝末期の財務長官ジャック・ネッケル (Jacques Necker, 1732-1804) は義伯父、スタール夫人 (Madame de Staël, 1766-1817) は義理の従姉妹にあたる。スタール夫人がジュネーヴ近郊コペ (Coppet) の城館で開いていた文学サロンに出入りし、ドイツ観念論・ロマン主義の重要人物たちと交友関係があったと伝えられる。アウグスト＝ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845) の『劇文学』(*Littérature dramatique*) を翻訳したり、また彼女自身にも *Education progressive* という著書がある。彼女はフェルディナンの大叔母にあたるが、彼が生まれる約16年前にすでに亡くなっているので二人の直接の出会いはなかった。

この二人を結ぶのは、アドルフ・ピクテ (Adolphe Pictet, 1799-1875) という人物である。ピクテはソシュール家の隣人で、アルベルティーヌ＝アドリエンヌの友人でもあった。友人とはいえ33歳の年齢差があるので、若きピクテにとっては、隣家の教養ある婦人として、彼女から当時の文学や哲学について聞き知ったのではないだろうか。

ソシュールは1870年から1871年の夏に、すでに70歳を越えた老ピクテをしばしば訪れる。1903年、45歳のときに綴った回想録のなかでソシュールはピクテについて次のように述べている。

> 『印欧語の起源』の著者である尊敬すべきアドルフ・ピクテは、私が12歳か13歳の頃、1年のうちの何日かを過ごした田舎の別荘の、家庭ぐるみでつきあう隣人であった。ヴェルソワ (Versoix) 近くのマラニー (Malagny) にある彼の地所でしばしば会ったものである。この偉大な老人に質問をして多くの事柄をききだす勇気はとてもなかったが、彼の書物に対しては子供心に深い賞賛の念を密かにあたためていて、その著作の何章かを真剣に精読していたのであった。サンスクリット語の音節1つか2つの助けを借りれば——こういうことがこの本の、そしてこのころのあらゆる言語学の理想にほかならなかったが——消え去った民族の生活を再発見できるという理想は、私のうちに熱狂の炎を燃やした。これほど素朴なものはない。子供時代のこの読書からいまでも時おり甦ってくるこの思い出ほど、言語学の喜びでこんなに甘美な、偽りのない思い出は私にはないのだ[16]。

16 « Souvenirs de F. de Saussure concernant sa jeunesse et ses études » in CFS 17 (1960), p. 16.

ここでは当時の「言語学の理想」が、語ないし語根を手がかりに「消え去った民族の生活を再発見」することにあったこと、それがソシュールのうちに「熱狂の炎を燃やした」ことを確認しておこう。

ソシュールは翌1872年、14歳のとき、「ギリシア語、ラテン語、ドイツ語の単語を少数の語根に還元するための試論」(*Essai pour réduire les mots du Grec, du Latin et de l'Allemand*

à un petit nombre de racines)[17]と題された、いわば処女論文をピクテに献呈する。ここでの「語根」とは単語を構成する原初的な核のことで、ソシュールは2つの子音で1つの母音を挟むかたちの語根構成を設定している。例はギリシア語、ラテン語、ドイツ語から取られているが、少年ソシュールの推論としては、あるゆる言語に属する単語すべてを12の語根に還元し、「ことばの一般的体系」(« un *système général du langage* ») を打ち立てるというものであった。語根を抽出する際に、印欧共通基語ときわめて近い関係にあるとみなされていたサンスクリット語をまったく参照していなかったり、そもそも歴史的な視点をまったく考慮に入れていないなど、ごく基本的な手続きが欠けていて、ピクテにとっては稚拙なものと映っただろう。ただし、「語根」という発想自体は、ピクテを含めて当時の言語研究において広く流通していたものであり、実際ピクテも『印欧語の起源』のなかで単一性をもった原始言語について述べる際に、この言語を「単音節の動詞的語根に富んでいるがゆえに、接辞の助けを借りてあらゆる種類の派生語をふんだんに生じさせた言語」[18]と規定している。比較言語学黎明期に活躍したドイツのフランツ・ポップ (Franz Bopp, 1791-1867) も、印欧語の単語を単音節の語根から派生してできたものと考えていた[19]。ソシュールの「語根」はたしかに結果的に単音節になってはいるが、母音が変化しても弁別特徴としては揺るがない2つの子音の組み合わせ方に力点が置かれているところに独創性を認めることができる。

「試論」に対するピクテの反応は少年ソシュールにとってショックだったようで、「これで私はことばの普遍的体系をきれいさっぱりあきらめる決心ができたものだ。[...] 自分の失敗した試みにいささかうんざりして、それから2年間は言語学を忘れていた。」[20] ソシュールはまさにこの出来事の2年後に、ピクテの勧めもあってボップの文法書でサンスクリット語の独習を始める。またこの間、コレージュ学生時代（1872-73)、15歳のとき、鳴鼻音（母音と子音両方の役割を果たす鼻音）を独自に発見している。これはその3年後にカール・ブルークマンが発表して言語学界に大反響を引き起こしたものだった。

17 CFS 32 (1978), pp. 73-101.

18 Adolphe Pictet : *Les origines indo-européennes ou les Aryas primitifs* (OIE), 2e éd., Librairie Sandoz et Fischbacher, Paris, 1877, p. 59.

19 堀井令以知、『比較言語学を学ぶ人のために』、世界思想社、1997年、29頁。Cf. Michel Foucault : *Les mots et les choses*, Gallimard, Paris, 1966, pp. 300-304.

20 CFS 17 (1960), p. 17.

2. 『印欧語の起源』についての書評

ピクテは1875年12月20日、76歳で亡くなる。翌1876年10月からソシュールは当時比較言語学が盛んだったライプツィヒに留学する。当地に居留中の1878年にピクテの主著『印欧語の起源あるいは原始アーリア』の第2版が出た折、ソシュールは『ジュネーヴ新聞』(*Journal de Genève*) にこの著作についての書評を3回にわたって掲載する（4月17日、19日、25日)。敬愛する師の主著を紹介する意気込みがあったのか、書評の調子はかなり「熱狂」的なものとなっている。

ロマン主義の化身ともいうべきピクテの人物像はソシュールが持ち出すいくつかのエピソードから窺い知ることができる。たとえば友人の東洋学者ビュルヌーフ (Eugène Burnouf, 1801-1852) に、言語学研究に見切りをつけたと思われて、「インドーゲルマンの心」(« un cœur indo-germain ») をもう蔵していないのかと尋ねられるが、「しかと蔵して

いる」と答える。あるいは、ある批評家が彼の特徴を評して曰く、「アドルフ・ピクテ氏の専門は、普遍的たることである。」[21]

ソシュールが語るところによれば、ピクテは幼少の頃から多岐にわたる才能を発揮した。博物学のコレクションを作り、音楽、数学、古代言語、哲学、美学、体育実技などに秀でていたという。1820年パリで折衷主義の哲学者ヴィクトル・クーザン (Victor Cousin, 1792-1867) と出会い、彼の仕事に参加した。1822年頃からは「ピクテの知的関心事の中心で、はやくも美の理論が飛び抜けて重要な位置を占める。」ボンでは「インドーオリエント」に関して「当時ヨーロッパでその秘めたる知識を手にするほぼ唯一のひとだった」アウグスト=ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルの知己を得、「サンスクリット語の研究に着手し、そして美学と文学の研究がこうして言語学的素養の基礎を彼に授けたのはおそらくこの時期である。」またドイツ滞在中にゲーテ、ヘーゲル、シュライエルマッハー、シェリングらと交わっている。とりわけシェリングは「偏愛してやまない哲学者だった」[22]。

1823年エディンバラで、「オシアンの詩」[23]をめぐる真偽論争をきっかけにケルト諸方言を研究し、ケルト語とサンスクリット語の類縁性を発見する。そして1837年に『ケルト諸語とサンスクリット語の親縁性について』を出版する（フランツ・ボップがこの種の仕事に着手するのは1839年）。また1856年に『自然、芸術、詩における美について』(*Du Beau dans la nature, l'art et la poésie*) を、1859-63年に『印欧語の起源』を公刊している。

ソシュールはピクテに主に二つの対立する側面を見る。それはたとえば「精神の魅力」と「学的堅実さ」、「哲学者」と「小説家」、「想像力」と「学的知識」、「詩人」と「学者」というかたちであらわれる。「芸術の本質」や「絶対者とそれ自身との同一性」などを扱っているという『シャモニー紀行、幻想物語』のなかでは、「哲学者」と「小説家」は、根底では親近性を持つのだが、やはりなお対照的であり、お互い出会うとき「電流が生じた。相対する両極のあいだで火花がほとばしり出た。闘いが開始されたのだ。諸観念の世界は端から端まで動揺し、二つの頭脳のなかで対立し相容れることのない形を纏った。そして悪夢にも似た一つの混合体のなかでぶつかり合うに到るのだった。」[24]

表面的に見れば多種多様なピクテの活動も、その根底には秘めたる導きの糸があるとソシュールは言う。そしてそれらは「共通の観念」、「一つの同じ精神」、「一つの同じ思考」から生じたものだということが繰り返し強調されている。その核にあるものとは、人智のおよぶ限界まで到らんとする倦むことのない「好奇心」である。この「好奇心」から、「ピクテはあらゆるスフィンクスの前で立ち止まり、あらゆる謎を熟考する。彼の著作で神秘の領域に根ざしていないものはひとつもない。」[25]古代文字の解読、超越的心理学研究、諸原理の原理についての「面白く、しかし深遠な」論考と並んで、先史時代の民族を、「その記憶全体が取り返しのつかないくらい失われている」にもかかわらず、思考によって「絵画（タブロー）」として再構築する試みは、この「好奇心」から発している[26]。この「好奇心」はけっして「軽薄」(« frivole ») ではなく、「最高の諸問題」に関わり、しかも「学的方法」を必要とするが、注目すべきはソシュールがそこに、ピクテにおける

21 *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure* (RPS), publié par Charles Bally et Léopold Gautier, Sonor, Genève, 1922; Reprint, Slatkine, Genève, 1970, p. 391.

22 RPS, p. 392. さらにピクテの交友関係を示す例として、後年ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) との共同研究がある。Jacob Grimm & Adolphe Pictet : *Über die marcellischen Formeln*, Dümmler, Berlin, 1855. マルケルス (Marcellus) とは、ローマ帝国最後の皇帝テオドシウス1世（大帝、在位379-395）の侍医。

23 3-5世紀頃、古代ケルト族の勇者で吟遊詩人のオシアン（オシーン）による叙事詩。オシアンのアイルランドやスコットランドでの見聞録が口承されたもので、1765年スコットランド生まれの詩人ジェイムズ・マクファーソン (James Macpherson, 1736-96) が英訳し『オシアン作品集』として出版するが、原作者の真偽が問題となる。いずれにせよ、各国のロマン派詩人に大きな影響を与えた。

24 RPS, p. 393.

25 *Op. cit.*, p. 394.

26 *Ibid.*

美学への傾向を結びつけていることである。

> それは、宇宙のごとき無限なもの、その宇宙を司ると考えられる諸原理のごとき神的なもの、人間の生の絶え間なく再生するいにしえの光景のごとき永遠なもの、とりわけそういったあらゆるものを前にしたときに高揚を覚えるような、諸事物についての理想的(イデアル)な考え方である。自然についての観想の中で覚える諸感覚を分析している、美についての著作に続いて、アーリア民族についての研究の根底には、思考によって再現された黄金時代のこの民族のなかには、理想的人間についてのほとんど意識的な夢がある。二つの絵画(タブロー)は対をなす。彼の思考は、常にそこで、想像力と科学との境界で、活動するのを好んでいた[27]。

27 *Op. cit.*, p. 395.

「二つの絵画(タブロー)」とは、「美」あるいは「感覚」(le Beau – esthétique – aisthètikos – sensation)と学的真理とが、ピクテの「一つの同じ思考」、「理想的(イデアル)な考え方」において、同一のものとして捉えられるということを表している。ソシュールは或る程度ピクテに彼の「偏愛してやまない哲学者」シェリングを見ていたのではないかと思われる[28]。いずれにせよソシュールはピクテを通して一度はドイツ・ロマン主義に接触している。

ピクテにとって諸言語の比較研究はそれ自体で完結したひとつの学問にとどまらず、民族の起源・発生や文明史を解明するにあたって、基礎として役立つのであり、その成果は始源の民族の生を解明するのに適宜応用・適用される。それゆえ諸言語の比較は、相対的な価値しか持っていない。「言語とは、前の世代全体が次の世代へ残す唯一確実な遺産である。幾多の時代を経ても決して消えることなく到り来る灯火に照らされて、闇夜を見はるかしてみようと試みることができる。するとその闇夜の下に種族(races)の過去があらわになる。」[29] ピクテはその試みを「言語学的古生物学」(« la paléontologie linguistique ») と呼んでいる。ピクテの意図は明らかに、先史時代の原始民族「アーリア」の生を、学的手続きを通して再構成することにある。重要なのは言語の存在ではなく、むしろ原始民族の存在である。ここではソシュールはピクテに同調し、「(印欧)諸言語の親近性は諸民族間の血の単一性を証明した」[30]とか、「かつてはこの一大種族がただ一つの民族(un seul peuple)を形成していたに違いない」[31]とまで言っている。印欧語族に属する言語のいずれにも認められる共通の語は、必然的に原始民族が話していた原始言語から由来したものであり、この民族がその語を持っているということはそれに対応する事物を持っているということである。そしてこのような符牒を根気よく収集していけば、移動・離散以前の種族が物的・知的に発達する様がわかり、この時代を描写する「絵画(タブロー)」ができあがるという。

一つの民族・種族を仔細に考察するということは、その文化、習俗、制度、信仰がどの程度のものなのか言えるほど、その存在がそれほど確固としたものであるということを前提とする。諸言語の比較によって得られた成果は、この種族が始源においてたしかに存在し、そしてそれがいかにして生まれ、成長し、枝分かれするのかを、事後的に再構成し、説明し、あるいは保証することができるはずである。古代民族「アーリア」を

28 Cf.「哲学が求めるものこそ、まさしくあの永遠の真理ではないか。この永遠の真理は美と一にして同一のものである。そして詩が求めるのは、あの不生不死の美ではないか。この不生不死の美は真理と一にして同一のものである。[…] あらゆる事物の最高の美と真理とは、こうして一にして同一のイデアのなかで直観されることになる。[…] ところでこのイデアは永遠なもののイデアなのだ。[…] さてそのイデアにおいて真理と似ているもろもろの作品においても、やはり真理と美とは必然的に一つのものだ。」(『世界の名著　フィヒテ/シェリング』、茅野良男訳、中央公論社、1974年、264-265頁。)

29 RPS, 395.

30 *Op. cit.*, p. 396.

31 *Ibid.*

めぐる民族誌学、地理学、自然史、物質文明、社会状態、知的・道徳的・宗教的生活、これらが研究すべき事柄である。民族と言語、民族の起源と言語の起源は分かち難く対をなす。

> 民族の発生がとことんまで露わになるという神秘がどんなものであれ、もはやなにものにも結びつけられ得ない一つの民族という考えがそれだけですでに惹起する問題がどうであれ、様々に異なる言語が放つ光は一点に収束し、それら諸言語が出会う点で、明確な母言語の像を与える。それはきわめて明確で、その主体には一つの声しかありえないほどだ。これこそ、一つの民族の言語である[32]。

32 *Op. cit.*, p. 397.

ピクテは原始アーリア民族の起源をバクトリア（現アフガニスタン北部）に設定しており、ここから移住によって拡散していったのだという。面白いのは「幾何学的形象」(« la figure géographique ») と呼ばれるもので、これは楕円形の周上のいくつかの点が「諸国民」の地理的位置を表しており、焦点の一つが始源の核たるバクトリアになっている。「言語学的古生物学」(la « paléontologie linguistique ») の方法としては、ピクテが言うところの「諸々の分蜂をもとの蜂群へ戻す」[33]手続きを通して、この始源の核にすべてを集約させることが当面の目標となる。

33 *Op. cit.*, p. 398.

3. 歴史・存在者・言語

いみじくもピクテが自らの仕事を「言語学的古生物学」(la « paléontologie linguistique ») と名付けたように、ここで問題になっているのは、palé(o)-onto-logie linguistique すなわち古代（先史時代）における原始民族の存在ないし生活を、言語を通して学的に再構築することである。さらに単純化・図式化し、歴史・存在者・言語の3項に注目してみる。

いささか逆説的ではあるが、ここでは何が問われていないか、つまり何が暗黙の前提となっているのかについて見てみると、それは「歴史」があるということ、先史時代の「闇夜」から今現在我々が生きている時代に至るまでの、不可視で共同の基盤・環境をなす「歴史」があるということである。むしろ諸言語の比較研究は、そこにおいて諸言語を見るところの「歴史」をつくりあげた。この不可視の基盤上で、言語は存在者と「対をな」し、その存在を保証する。たとえばいくつかの古代言語のなかに、或る樹木を表す語や、或る道具を表す語が見出されるならば、それはそのまま、古代の民族を取り巻く環境のなかに、その語によって指示されるところの事物の存在を確証することになる。ピクテは「語」を「化石」になぞらえて、「過去の暗闇に埋もれた世界の諸事実、諸事物、諸観念をいわば再生させる」[34]のが「言語学的古生物学」の目的だと主張する。それは、原始民族が起源の言語を生み出す、その「精神」を捉えるためでもある。むろんピクテには「世界で最も強い種族、われわれが所属しているまさにその種族」[35]に対する深い憧憬がある。

34 OIE, p. 14.

35 *Op. cit.*, p. 16.

一民族の言語がその民族の存在のあり方全体の最も忠実な似姿を提示していること、そしてその言語が埋蔵物のように、その民族の物質的・精神的な歴史の最も確実な証拠を蔵していることが、しばしば観察されてきた。しかしながらこのことは、語が事物そのものの直接的な似姿であり、恣意的な音によってだけではなく特徴を刻印された意味によって表現するような原始諸言語についてのみ、完全に正しい。ところで、意味を有する語は、その語を生み出した観念を直接的に披瀝するのであり、そのような語から構成される特有語は、透明な布地を通して見るときのように、その特有語の形成を司った精神の働きをことごとく見させるのである[36]。

36 *Op. cit.*, p. 13.

ところでこの著作のなかで « la linguistique générale » という表現が見られる[37]。これは「印欧共通基語を探求する学問」というほどの意味だが、さらにピクテの最終的な目標に鑑みると、« générale » は「一般的な、共通の、普遍的な」という意味だけではなく、「種族に関わる」（ラテン語 *generalis* ある種族に属する < *genus, eris* 種族）という語源的な意味も併せて考慮しておくべきだろう。『印欧語の起源あるいは原始アーリア』（*Les origines indo-européennes ou les Aryas primitifs*）という題名も、フランス語だけを見れば「言語」（*langues*）はどこにも入っておらず、副題も「言語学的古生物学の試論」（Essai de paléo*ntologie* linguistique）とあるので、「印欧語族の起源あるいは原始アーリア民族」もしくは「インド＝ヨーロッパの起源あるいは原始アーリア語族」という訳のほうが、あるいはピクテの意図をよく伝えているかもしれない。いずれにせよ、« la linguistique générale » は、印欧諸言語の起源としての共通基語を探究しようとするところから始まっている。

37 *Op. cit.*, p. 15.

4. ジュネーヴ大学就任講演（1891年）

ソシュールは1891年、約10年間のパリ生活を終え故郷のジュネーヴに戻り、3回にわたってジュネーヴ大学教授就任講演をする。初日の講演の冒頭でピクテについての言及が見られる。

私はここで、ほかのことでも何かとお国自慢のたねになる、ひとりのジュネーヴ人の名を思い出さざるをえません。それは、アドルフ・ピクテです。この人こそは、先史時代の証拠として利用できる言語の役割を方法的に知り抜いた最初の人でした。たぶん、彼は言語が教えうるものの真実性、その絶対的な価値を信じすぎていました。思いがけない世界から突然の啓示を受けた彼は、湧きあがる初期の熱狂に抵抗することができませんでした。しかし、彼がひとつの確固とした研究分野の創始者だったことに変わりはなく、この分野はとうぜんながらいまも学者たちの連綿たる系列によって切り開かれつつあります[38]。

38 Ms. fr. 3283 = N 1.1, pp. 1-2.『沈黙するソシュール』、20-21頁。（« Ms. fr. » は「ジュネーヴ公共大学図書館フランス語手稿（目録番号）」、« N » は「ソシュール一般言語学関係の手稿（番号）」の意。以下同じ。）

しかしソシュールは言語学の独立という見地から「民族誌学」を批判する。ソシュールもピクテを「創始者」と呼ぶが、とはいえそうした研究を「基礎として役立」てつつさらに発展させるのとは事情が違っている。その違いを見てみよう。

およそ学問が自立し、認知されるにいたるためには、その学問が「真摯な注意に値する対象」[39]を持たねばならない。「言語から降ってわいた光明が、突然ほかの学問領域や研究対象を照らすとしましょう。かりにそれがどんなに強い光でも言語それじたいの研究には、絶対に二次的で派生的な重要性しか持ちはしないのです。」[40]ピクテの「言語学的古生物学」で最終的な対象をなすのは存在者すなわち原始民族の生であり、言語の研究はあくまで補助的なものだった。しかしここでは対象をなしていた存在者が切り落とされ、代わって言語が対象として措定される、つまり言語の存在が問題となる。これは存在者と言語の価値を反転させるといったようなことではなく、端的に存在者が除外される。「言語学的古生物学」ないし「民族誌学」の対象そのものを切り落とす、この矛盾によって、言語学は独立しようとしている。すぐ後で触れるが、なんらかの現前性へと送り返されない言語の問題は、この矛盾に起因する。ソシュールが「言語それじたい」(« la langue elle-même ») を問うのはまさにこのような状況においてであり、「使用」あるいは「パロール」と対置することによってではない。また今では関係論を導き出すための基礎と見られている「言語名称目録観」批判は、このように言語学が「言語学的古生物学」ないし「民族誌学」と訣別し、その対象を切り離すという事情を踏まえている。

39 Ms. fr. 3283 = N 1.1, p. 4.『沈黙するソシュール』、22頁。

40 *Op. cit.*, p. 5. 同所。

歴史・存在者・言語のうち、存在者が抹消されれば、残るのは歴史と言語で、果たしてソシュールはこの講演のなかで「史的学問」としての言語学の独立を提唱している。言語学が「史的学問」だとして、ここで検討すべきは「歴史」であり、ソシュールは「歴史」についての註釈を試みる。重要なのは、しかじかの地域でしかじかの時代に話されていた言語の存在（つまり現前的存在者としての言語）だとか、それが他の地域からの影響や支配によって消滅したといった「歴史における言語の視点」ではなく、あくまで「言語の歴史の視点」だという。ソシュールは、時間における「言語の連続性」と「言語の可易性」という二つの相補的な原理によってこのことを説明しようとする。

第一の「言語の連続性」は「非断絶」のことで、これは外的な暴力以外で、言語が存続を止める内的な理由はなにもないということである。「ひとつの言語が、与えられた天命をまっとうして、内的枯渇によって死に絶えることは決してない。言語は、それじたいにおいては不死なのです。言いかえれば、言語がその組織のありかたのせいで伝承停止になる道理などないということです。」[41]また、「ラテン語」と「フランス語」という二つの名称があるが、そこには「継承」と呼ばれうるものがあるにせよ、「二つのものがあり、一方が他方を継いでいる」のではない。なぜなら、「誰も寝る前に話していた特有語を次の日も話すことになり、しかもつねにそのとおりである。だから、ラテン語の死亡診断書が書かれた日はなかったし、フランス語の出生届が書かれた日もありはしなかった。」[42]これは、「事物」としてあらかじめ存在する言語が、次の日にも反復されるということではない。常に既にその言語は反復されていて、そう反復されるということによってのみ、その言語は存在しているといえる。反復されるということがその本質で

41 *Op. cit.*, p. 27. 同書、54頁。

42 *Op. cit.*, p. 22. 同書、51頁。部分的に訳をあらためた。

あるような言語が反復されるのである。ソシュールはそのことを「人間的行為」と呼ぶ。この「行為」は「歴史」の中に書き込まれ得る「使用」としての、一回的であると言われる「行為」とはまったく異なっている。それは言語が「事物」でないこと、この一点のみを請け負っている。

> どんな言語も暴力的に抹殺されない限り、死ぬことはありえない。あるいは、どんな言語も老人であったり子供であったりすることはない。最後に、新しい言語がこの世に生まれることもありえない。ある民族の言語を抹殺して、べつの言語を押しつけるとしましょう。その言語は、とうぜんながら廃止された言語とまさに同じだけ古いのです。地上には、まえの晩から存在している、常にまえの晩から存在している特有語の連続しかありません。それは、遙か先史時代の計り知れない闇夜まで行ってもそうなのです[43]。

43 Ms. fr. 3285 = N 1.3, pp. 1-2. 『沈黙するソシュール』、96頁。

「闇夜」の下に見えていた「種族の過去」などというロマンティックな「絵画(タブロー)」はもはやない。たとえ対象が言語であっても、言語の始源をつきとめるのは不可能である。むしろ「始源」そのものがロマンティックな「歴史」によって設定されたものである。しかも言語は死なない。それは言語が生まれてさえいないからである。言語の存在に必要なのは反復であって、誕生ではない。言語の存在には言語の自己反復が内在的に含まれている。言語の反復=存在は、その言語を話す或る特定の「語族」であるとか、個別的・具体的な「行為」を、必ずしも前提とはしない。ある言語が外的に廃棄されて別の言語に取って代わられても、今度は「常にまえの晩から存在している」、前者と「同じだけ古い」後者が存続するだけだ。そもそもそうした外的暴力は、言語の内的存続可能性（反復可能性）に打撃を与えることができない。ここにおいて、言語を取り巻く環境としての「歴史」は解体される。

しかしソシュールが第二の原理「言語の可易性」によって言語の「絶えざる変容」を提示するとき、この「歴史」は再び「言語」を取り巻く環境となり、「歴史における言語の視点」が浮上してくる。この意味での「歴史」は19世紀の歴史言語学が前提としていたものとほとんど変わらない。

「歴史」の中で、一つの言語が生まれたり、成長して老いたり、死んだりする、このイメージに、我々の常識的な思考は抵抗するのが難しい。現にいまでも「ラテン語からフランス語への変化」とか「古ゲルマン語からドイツ語への変遷」などとごく普通に口にする。しかし、一つの言語が生まれたり、成長して老いたり、変化したり、死んだりすると思うのは、あるいはそもそも変化する一つの言語があらかじめ存在すると思うのも、暗黙のうちに不可視の基盤としての一つの「歴史」を設定しているからにほかならない。その基盤の上で、言語や語、音、意味などが存在し、それらが変遷していく、と考えるのである[44]。「共時態」と「通時態」の区別を解消しようという試みや、「通時態」を「点の歴史から面の歴史へ」として捉える考え方には、かたちは多少変わっているにせよ、なお環境としての「歴史」、あるいは端的に環境が前提となっていると言える。

44 歴史音声学が暗黙のうちに依拠していた同一・共通の「歴史」に対する批判は手稿4で簡潔に説明されている。「我々がつい想定してしまうのはこういうことだ。音声学が扱う諸事象は「ひとつの時代に」ある。それらは何の差し障りもなくひとつの時代にある。それらを説明するときにだけ、場合に応じて先行する時代を介入させることが必要であったり、そうするよう促されたり勧められたりする。結局二つの時代はひとつの全体である。――これこそは現在の言語学の典型的な誤謬のひとつである。これについてはいずれ別の機会にきちんとした視点から反駁することにしよう。ここでは次のことを主張するにとどめておく。ひとつの音声的事象を説明するために、すなわちそれをひとつの法則へと導くために二つの時代が必要になるというよりむしろ、それを構成するために、それが存在しうるために、諸法則へと導かれるべき対象のひとつでありうるために、二つの時代がつねにすでに必要なのである。」（Ms. fr. 3289 = N 4.）

ソシュールはまず「歴史」の上に平行して並ぶ「存在者」と「言語」という考えを打ち崩した。さらに「連続性の原理」によって「歴史における言語の視点」をも否定し、「言語そのもの」の中に「歴史」を組み込もうとするのだが、このとき「歴史」そのものの意味が変化せざるをえなくなり、「史的学問」であるはずの言語学は行き詰まる。また「可易性の原理」においては「歴史における言語」に逆戻りし、相補的であるはず二つの原理の間でジレンマに陥っているのである。ソシュールはこのことをまだ完全に意識しているわけではない。

このように、上で措定した3項のうち存在者（民族誌学の対象）を完全に捨て去り、そして今度は「歴史」を検討して行くなかで矛盾に突き当たっているという点で、1891年のこの講演はソシュールの、「歴史」をめぐる思考の過渡的段階を示していると言える。

5. ソシュールの余白

ソシュールはアントワーヌ・メイエ (Antoine Meillet, 1866-1936) 宛に1894年1月4日附で一通の手紙を送る。このなかでソシュールは次のように述べている。

> つまるところ、いまでも私の興味をひくたったひとつのものと言えば、それは言語の絵画的側面というか、その言語を特定起源の特定民族に属させて他のすべてと異ならせる、あのほとんど民族誌学的な側面でしかありません。そしてまさしく、もう私に取り戻せないのは、こういう研究に無邪気に打ち込む楽しさ、個別環境のなかの個別事象とじゃれあっている楽しさです。
>
> 流布している用語のまったくの愚昧さと、それを改革し言語一般がどのような種類の対象なのかを示す必要性が、絶えず私の歴史の楽しみをぶち壊してしまいます。言語一般などに関わりたくないという思いほど切なるものはないのにです[45]。

45 CFS 21 (1964), p.95. 『沈黙するソシュール』、170-171頁。部分的に訳をあらためた。

しかしソシュールは「なさねばならない仕事」をするとも言っている。それは「（ことばの）事象の論理的分類と、それを扱う際に拠って立つ視点の分類」、「各々の操作を予測されるカテゴリーに還元するという仕事」である。そして「これには一冊の書物でけりをつけ」るという。「一冊の書物」というのは、この当時ソシュールは一般言語学に関する書物を執筆しようという意図があったようで、いくつかの断片的な草稿が残っているのだが、書き始めては中断し、また書き直してというような体裁で、結局「一冊の書物」として世に出ることはなかった。それはたんにソシュールの書き方がそうであったというよりも、書くべき事柄がそうさせたように思われる。彼は「書物」になりそこねた草稿の中で、当の「書物」のあり方について説明している。

> 私が真理と思われる事柄のひとつひとつに到達したのは、多くの様々な道を通してであり、ひとがそのうちどれを気に入るかは正直言ってわからない。命題全体

を適切に提示するには、確固として定まった出発点を採る必要があるのだろう。しかし私が立証しようとしているのは、言語学においてそれ自体で定義される事象をたったひとつでも認めるのは誤りであるということにつきる。したがってまさしくあらゆる出発点が不在なのであり、もしある読者が私の思惟を、この本の端から端まで注意深くたどろうとしたら、きっと彼は厳密に順序をたどるのはいわば不可能であると悟るだろう。私はあえて、三度でも四度でも違ったかたちで同じ考えを読者の前に差し出すだろう。実際、論証を基礎づけるのに、他よりも適切な出発点などないからである[46]。

46 Ms. fr. 3295 = N 9.1, pp. 4-5, n° 128.『沈黙するソシュール』、163頁。部分的に訳をあらためた。(« n° » は「エングラーの断章番号」の意。*Cours de linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, Otto Harrassowitz, 1967-68.)

『講義』の編者は、「自由な論述では免れえないくり返しや、跨りや、言い表し方の違いなどが、そのような出版物にざっぱくな外観を与えることは必定である」[47]として「合理的」な「総合」を試みたのだったが、ソシュールが意図した「書物」のあり方はそれとはまったく別のものだった。そして実際「書物の草稿」と呼ばれるこの手稿では、言語をめぐる、あるいは言語についての言葉をめぐる「同じ考え」が、断章形式を取り、「三度でも四度でも違ったかたちで」説明されている。批判はとりわけ、当時の言語学が対象として取りあげた「音声形」(« figure vocale ») に向けられている。

47『講義』、3頁。

第一の考え方。

「ラテン語 *cantare* がある。」それから次にいくつかの「…の視点で」が始まる。たとえば、この *cantare* は、それが表す音声形「の視点で」カフラリア語やサモイエド語の単語に同一だ。この形態の規則的連続「の視点で」は、フランス語の *chanter* に同一だし、ラテン語内の価値「の視点で」は *cantare* に同一だ。

このとき、それを互いにまったく違ったものにしてしまう多くの視点から、つぎつぎに *cantare* を考察するにあたっては、真の *cantare* とはいったい何で、その存在の保証は、あるいは端的にその存在の堅固な形はどこにあるのかを知ることが、第一条件であると気付く。ここで導かれる先は、

第二の考え方。「ひとつのラテン語 *cantare* がある。」などというのは、無理だと認めよう。選ぶべき視点のそとでは、何がどうなっているのか、一切わかるはずがないからだ。だからこそ、しっかりした基盤を与えてくれる視点を選ぼうではないか。私たちは、きっぱりこう宣言する。われわれにとって *cantare* は音声形 *kan-ta-re* で、それに付加されるものはすべて属性だと。

[6行分の空白]

第三の考え方。われわれにとって容認できる唯一のもの。

何もない、すなわち視点の外で確定されるものが何もないだけではなく、他の視点よりも適切な視点がない。まず、さまざまな視点を比較する批判があるだけだ。

ひとつのラテン語 *cantare* やひとつの音声形 *cantare* について話す権利は誰にもない。そんなことを言っているのはなるほど滑稽だ。あるいは逆に、滑稽なく

らい明白なことだ。

同一性　*cantare*　|　*cantare*

同一性　*cantare*　|　*cantare*

意味と用途　|　意味と用途

同一性　*cantare*　|　*chanter*

言語をめぐる操作は、正しいにせよ誤っているにせよ、そのあらゆる種類が、われわれの立てた諸原理の助けを借りて体裁を整えているのだと言っておこう。

様々な同一性がある。これこそが言語事象の様々な次元を創り出す。なにかしら同一性の関係がなければ、言語事象はひとつとして存在しない。しかし同一性の関係は、ひとが採用すると決めるいろいろな視点に依存している。だから諸々の区別を司る決まった視点のないところでは、言語事象は微塵もない[48]。

48 Ms. fr. 3295 = N 9.1, pp. 8-10, n° 129. Cf.『沈黙するソシュール』、165-166頁。

批判されるべき「第一の考え方」とは、言語事象が「自然的に与えられている」という「幻想」、つまりあらかじめ存在しているものを様々な「視点」から眺める素朴実在論のようなもののことだ[49]。「第二の考え方」は当時の歴史言語学の立場だろう。これは「音声形」を確固とした対象として措定する特権的な「視点」をなす。ソシュールがなそうとしているのは、歴史言語学の特権的な地位を、あまたある「視点」のひとつに還元しようということである。これはメイエ宛の書簡の中で言っていた「視点の分類」に対応する。「第三の考え方」によれば、なんらかの「同一性」を設定する「視点」次第で「言語事象」の何たるかが決まる。しかし「視点」が決まったからといって、「言語事象」なるものが「存在」すると手放しに言っていいわけではない。これではまた「第二の考え方」に逆戻りしてしまう。

49 *Op. cit.*, p. 7.

言語学がその独立にあたって「民族誌学」の対象そのものを切り落とすという矛盾を矛盾として問題にせずに済んだのは、言語事象の事物化によってこの矛盾を（無意識裡にせよ）隠蔽したからにほかならない。そうして「言語（ラング）それじたい」の問いは、事物化された言語事象の研究にすり替えられる。「歴史」という環境のなかで、事物化された言語事象（特に「音声形」）が確固とした対象として研究されるのである。ソシュールがつくのはまさにその点だが、それは言語学の独立が孕んでいた矛盾を矛盾として露呈させることでもあり、その矛盾は「何もない」という、「言語それじたい」を対象とすべき言語学の不可能性に帰着してしまう。同じメイエ宛書簡の中でソシュールは「なぜ言語学には適切な意味を持って使われる用語がひとつとしてないのかを説明する」とも言っているが、これはすなわち、ことばについての言葉がなぜ常に正しくことばを言い当てないのかを説明するということだ。しかしこれは、ことばがないということを言っているのでは、決してない。むしろ絶対にことばはある。ただ、ことばはあるという、この一点の肯定を絶対的に支える言葉がないのだ。

ことばについての言葉には、「確固として定まった出発点」や「基礎として役立つ」何かがない。このとき、この「書物」ならざる「書物の草稿」のなかで、「何もない」という「容認できる唯一の」推論について書くことをためらった、あるいは後で埋められる

べく残されたのかもしれない、この「何もない」6行分の空白は、この「書物」ならざる「書物の草稿」の読者にとって、ある種異様さを帯びて見えてくる。余白になってしまったこの空白には、ことばと、ことばをめぐる言葉との断絶として、ことばに関する何かが、「言語(ラング)それじたい」が、現れることなく現れようとしているのではないか。「何もない」と書きつける一歩手前のこの空白のうちに、不在のうちに、何かを読み込もうとするのはたしかに無理があるかもしれない。しかし少なくともここには、空白を越えて、「何もない」と書くことに対する異常なまでの意識が読み取れる。「容認できる唯一の」考え方と書きながら、それを容認してしまえば、真正な対象を欠く言語学は一挙に不可能になってしまうのだ。

たしかにソシュールは「言語一般」についての「書物」を書くことに一度も成功していない。しかし、「言語(ラング)それじたい」の存在のまったき不可解さは、それについて書くことの失敗から翻って、むしろ裏側から書かれてしまっていることになると言えるのではないか。ソシュールはことばについて書かれうる（あるいは書かれるべきではない）ぎりぎりの、「何もない」という出発点ならざる出発点から出発し、そして結局「書物」という目的に到達することができない。ここに、「言語(ラング)それじたい」の存在を問わずに、「ラング」あるいは「記号論(ル・セミオティック)領野」を「基礎として役立」てて「言説(ディスクール)」あるいは「意味論(ル・セマンティック)領野」へと飛躍し、成功を収める言語学との、根本的な違いがある。

バンヴェニストが言うように、「ソシュールはその運命を十分に果たし」てしまっているだろうか。言語学を厳密に基礎づけようとし、それと同じ挙措によって言語学の不可能性を露呈させてしまうこの言語学者の「思想」が、「此岸における生命を越えて」(« Par-delà sa vie terrestre ») そのまま「われわれの生と一つに渾融してしま」ったり、その「死後の運命」が「第二の生」になったりすることなどありえないだろう。ソシュールは言う。「ラングの領野に足を踏み入れる者は誰でも、天と地の類推一切から見捨てられると考えていい。」(« quiconque pose le pied sur le terrain de la *langue* peut se dire qu'il est abandonné par toutes les analogies du ciel et de la terre. »)[50] だが言語学はむしろ言語事象を「天と地の類推」に還元することで発展してきたと言えるのではないだろうか。そのような状況下でソシュールが「天と地の類推一切から見捨てられ」て踏み込んだ「ラングの領野」の来歴を、きわめて概略的ながら、つきとめようと上で試みた。それが十分に果たされたとはとても言えまいが、少なくとも言えるのは、ソシュールを言語学史・思想史の上のたんなる「先駆者」に仕立て上げ、健全な喪の作業によって忘却することだけは避けねばならないということである。

50 Ms. fr. 3297 = N 10, p. 38, n° 1267. Cf.『沈黙するソシュール』、236頁。